

⇒ 論 説 ⇐

『ハムレット』の the ‘little eyases’ passage に関する一考察

辻 照 彦

はじめに

『ハムレット』の the ‘little eyases’ passage (II.ii.335-358) は『ハムレット』の創作年代を議論するときに必ず言及される有名な passage である。この passage はまた、F にのみ見られ、Q2 に見られない3つの passage のうちの1つとしても有名である。この passage に関しては、他の2つの passage (II.ii.239-269, V.ii.68-80) と比較して、カットされた痕跡が明白でないため、アディクション説が根強く主張され、カット説とアディクション説はこれからも平行線をたどって行きそうな様相を呈している。

カット説の立場からは、Q2 のままでは話の連続性が欠如しているとか、劇団の人気の低下を説明するローゼンクランツに対して、ハムレットが直後にクローディアスの人気の上昇に言及するのはロジックがおかしいという Harold Jenkins の指摘がある¹⁾。W. W. Greg も F の abrupt な話題の変化が Q2 ではより abrupt になっていると述べてカット説を採用している²⁾。

アディクション説の主張者たちは、Q2 のままでも話の連続性の欠如など存在せず、台詞は問題なく繋がっていると主張する。E. A. J. Honigmann は F でも Q2 でも意味は通ると述べ、the ‘little eyases’ passage の欠如が Q2 の the texture of ideas を傷つけていることはなさそうだと論じている。Q2 からの長い欠落があるなら、そこには不完全な接続の痕跡が見られるはずだが、それが存在しない以上、the ‘little eyases’ passage は後で追加的に挿入されたものと見なさざるを得ないという主張である³⁾。G. R. Hibbard は、F だけに見られる passage は3つともすべてアディクションだという最も極端な立場をとっている。彼は、切断の痕跡が明白と思われる他の2つの passage も含め、3カ所とも Q2 のままで十分意味が通り、F にのみ見られる passage はすべて観客の理解を容易にするために後で追加されたものだと主張している⁴⁾。

確かに、the ‘little eyases’ passage には、他の2つの問題の passage のような文法的な不完全さや台詞の途中での切断といった表面的なカットの痕跡は見られない。しかし、筆者には、Q2 のままでは、台詞の流れに不自然さやぎこちなさが残るように感じられる。本論では、the ‘little eyases’ passage とその直後のハムレットの台詞を、そのアナロジーとエコーを中心に分析し、両者の間には緊密な連続性が存在すること、すなわちハムレットの台詞は the ‘little eyases’ passage を前提として成り立っており、両者はもともと一体のものと考えてべきであることを示したい。

アナロジーとエコー

アディクション説といっても、追加された時期や追加された部分をめぐってその内容は様々でありうる。しかし、本論で問題にしているアディクション説の主張は、Q2の印刷原稿とされる *foul papers* にはQ2のように the ‘little eyases’ passage が欠落した状態で台詞が書かれていたということであり、シェイクスピアがある時点で、そのような形で原稿を書いたということである。筆者は、シェイクスピアがどのような時点であれ、Q2のような形で原稿を書き上げたと考えることは困難だと思っている。Q2の問題の箇所を引用してみよう。Jenkins 編集によるアーデン版から the ‘little eyases’ passage を削除して引用する。ハムレットに、役者たちが本来の活躍の場であるシティーからエルシノアにやってきた理由を尋ねられてローゼンクランツが答えるところからである。

Ros. I think their inhibition comes by the means of the late innovation.

Ham. Do they hold the same estimation they did when I was in the city? Are they so followed?

Ros. No, indeed are they not.

Ham. It is not very strange; for my uncle is King of Denmark, and those that would make mouths at him while my father lived give twenty, forty, fifty, a hundred ducats apiece for his picture in little. ‘Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.

ハムレットの最後の台詞の前に the ‘little eyases’ passage が欠落しているが、表面的には目立ったカットの痕跡は見られない⁵⁾。確かに、Jenkins が指摘するように、役者たちの人気は低下したという説明に対して、ハムレットは人気上昇したクローディアスの例を挙げて、それは珍しいことではないと言っており、話がねじれているような感じはする。しかし、ここで問題にされているのは大衆の人気の気まぐれな性質だと考えれば、人気低下した事例に人気上昇した事例をパラレルとして提示することは考えられないことではないかもしれない。

しかし、上の引用を読んで一番奇妙に感じるのは、ハムレットの “Do they hold the same estimation they did when I was in the city? Are they so followed?” という質問と、ローゼンクランツの “No, indeed are they not.” という返事が短く簡潔なものであるのに対して、その後、ハムレットがそれはそれほど珍しいことではないと言って例示するアナロジーがより具体的で長いことである。なぜ叔父がデンマーク王であることや、以前は軽蔑されていたこと、さらに、そのミニチュアの肖像画が高値で買われていることまで詳しく説明されなければならないのだろうか。さらに最後のところには、少し意味が曖昧に感じられるが、結びのコメントも付けられている。

このシーンの性質からして、ハムレットが合理的な返事をすることや、旧友の説明に対して厳密に対応したアナロジーを提示することを期待すべきではないかもしれない。しかし、the ‘little eyases’ passageがハムレットの台詞の直前にあれば、ハムレットの台詞の唐突さはかなり解消するのである。the ‘little eyases’ passageの後半部分を復元した形で最後のハムレットの台詞まで引用してみよう。

Ros. Faith, there has been much to do on both sides; and the nation holds it no sin to tar them to controversy. There was for a while no money bid for argument unless the poet and the player went to cuffs in the question.

Ham. Is't possible?

Guild. O, there has been much throwing about of brains.

Ham. Do the boys carry it away?

Ros. Ay, that they do, my lord, Hercules and his load too.

Ham. It is not very strange; for my uncle is King of Denmark, and those that would make mouths at him while my father lived give twenty, forty, fifty, a hundred ducats apiece for his picture in little. 'Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.

ハムレットの “It is not very strange;” という言葉は、Q2の場合は、ぶっきらぼうな印象を与えるが、Fでは、その印象がかなり異なる。それは、ハムレットが2つ前の台詞で、いわゆる劇場戦争と呼ばれているものに対して、そんなことが可能なのかと驚きを示しているからである。Fの場合、ハムレットの “It is not very strange;” という言葉は、熟考すれば、それほど珍しいことではないという感じだと思われる。

引用の直前のやりとりを見ると、ハムレットははじめ少年劇団が一方的に成人劇団を誹謗しているだけだと思っていたようだが、ローゼンクランツから、成人劇団の方も騒ぎ立てて大人対子供のいわば戦争状態になっていることを知らされて驚いている。そして、“Do the boys carry it away?” と質問して、結局勝ったのは少年たちなのかと確認している。

ここはまさに、劇場戦争とも言われるように、戦争のメタファーが使用されていて、carry it awayとは勝利するという意味で、元来、勝利の象徴である棕櫚の枝や戦利品などを誇らしげに持ち去るイメージからできた表現である。子供が大人を打ち負かすというだけでも滑稽だが、ローゼンクランツは、ヘラクレスとその肩に担がれた荷物である地球も持ち去ったと言って、滑稽さを戯画化している。グローブ座も打ち負かされたという裏の意味が込められているにしても、ここでは、英雄ヘラクレスと地球を子供たちが戦利品のように持ち去る文字通りのイメージも重要であり、それにより世界（劇場世界）が子供によって支配されているという事態の珍妙さが強調されている。

このように見てくると、ハムレットがそれほど珍しいことではないと言っている内容は、一般的に考えられているように大衆の人気の気まぐれな性質とだけ考えてよいのかという疑問が生じてくる。“It is not very strange;”のitが指しているのは、大衆の人気のカプリスというより、より中心的には、子供が大人を打ち負かし、劇場世界を支配してしまうような滑稽なほどの価値の逆転、あるいは価値の混乱状態なのではないだろうか。

このように考えると、ハムレットの最後の台詞に新王クロードィアスや先王ハムレットがアナロジーとして登場する理由がより理解しやすくなると思われる。ハムレットは、劇場世界で起きている価値の混乱がそれほど珍しいことではないことを証明するためにデンマーク国内で起きている価値の混乱をアナロジーとして例示しているのである。ハムレットはまず“for my uncle is King of Denmark,”と続ける。この表現は妙に形式張っていて、なぜ今更このようなことを言わなければならないのか不可解な感じがする。実際Q1にはこのような表現はない。Q1ではハムレットの台詞は次のようになっている。

I do not greatly wonder of it,
 For those that would make mops and moes
 At my vnclē, when my father liued,
 Now giue a hundred, two hundred pounds
 For his picture: . . .

人気の急変ぶりを強調するためだけなら、Q1のような表現で十分だと思われる。それをわざわざ“for my uncle is King of Denmark,”と表現したのは、単に現在叔父のクロードィアスが王位に就いているということを行っているだけではなく、劇場世界を少年劇団が支配(carry it away)しているのは、ちょうどデンマークが叔父によって支配(carry it away)されているのと同じだという辛らつな皮肉が込められているからではないだろうか。

逆に亡くなったハムレット王は、本来なら劇場世界を支配し、人気と名声を享受すべきとハムレットが考える成人劇団のアナログになっている。そのアナロジーは、ローゼンクランツの最後の台詞の中で、子供たちに打ち負かされる相手としてヘラクレスが加えられることでさらに補強されている。なぜなら、ハムレットは作品中で父親を繰り返し神格化しているからである。クロゼット・シーンでハムレットは父親をHyperion, Jove, Mars, そしてMercuryにたとえている。また、1幕2場の最初の独白では、父親をHyperionに、そしてクロードィアスをsatyrにたとえた上で、兄弟でありながら、クロードィアスが父親に似ていないのは、自分がヘラクレスに似ていないのと同様だと述べて、直接ではないが、間接的に父をヘラクレスにたとえている。子供たちがヘラクレスを打ち負かすという珍妙なイメージは、半獣神のような叔父がヘラクレスのような父を打ち負かして支配者の座に就いているというイメージとパラレルになるのである。

ハムレットの台詞の結びとなる “‘Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.” という部分もこのような文脈で読んだ方がハムレットの真意を理解できると思われる。文中の this が何を指すのかは曖昧である。Q2のまま読めば this は直前に述べられていること、すなわち、かつてクローディアスを軽蔑していた人々までが彼のミニチュア肖像画を高値で買い求めていることを指すだろう。more than natural という表現が単に abnormal という意味なら、このような大衆の行為は確かに abnormal であり、Q2のままでも何の問題もなさそうに見える。

しかし、more than natural という表現からは、自然の道から外れたという強い非難のニュアンスが感じられる。さらに、ハムレットが他の場面でクローディアスや母親の unnatural な行為を繰り返し非難していることを考えると、この台詞には、ローゼンクランツとギルデンスターンの目をくらませるためのカモフラージュが施されているが、ハムレットの強い憤りが込められていると考えるべきだろう⁶⁾。そして、その憤りの対象は the ‘little eyases’ passage とハムレットの台詞によって描き出されたパラレルな現象、すなわち、本来低い価値のものが高い評価を得たり支配的地位を独占しているという価値の混乱や逆転なのではないだろうか。ハムレットにとって、少年劇団が成人劇団を打ち負かして劇場の支配者となっていることや、それとパラレル関係にある、英雄的な父の後に道化のような叔父が国王として君臨していることは、自然の道から外れた、本来許されざる事態なのである。

ハムレットの最後の台詞の中には、さらに the ‘little eyases’ passage のエコーと思われる要素がある。“for his picture in little” と肖像画の微小なサイズを強調したところは、ミニチュア役者ともいうべき子供役者とのパラレルを意識したものであり、この点は Edward Dowden や Jenkins がすでに指摘している⁷⁾。さらに、叔父のミニチュアの肖像画が高値で買われているという部分は、“give twenty, forty, fifty, a hundred ducats apiece” とことさら値段の上昇が強調されている。このオークションのような値段の上昇の仕方は、ローゼンクランツの台詞の中の “There was for a while no money bid for argument unless the poet and the player went to cuffs in the question.” という部分と響き合っているのではないだろうか。全く買値がつかない (no money bid) という表現に対して、倍々に値 (bid) がついていくという対照的な反応を対比させているのである。no money に対して数十ダカットや100ダカットというのは法外な値段であり、Q1はそれを100ポンドや200ポンドにパラフレーズしている⁸⁾。

アディクション説の主張

ここまでハムレットの台詞と the ‘little eyases’ passage の緊密な連続性をアナロジーとエコーを指摘しながら見てきたが、ここからはアディクション説のポイントを少し詳しく見てみることにしよう。HonigmannもHibbardもシェイクスピアをはじめQ2の形の手稿を書き、その後のある時点で the ‘little eyases’ passage を追加したと主張する。

Honigmann は Q2 の段階ではシェイクスピアは少年劇団の台頭に軽く触れただけだが、劇場戦争が激しくなってきた、反撃が必要となったとき、すでにその問題を扱っていた『ハムレット』を利用して、the ‘little eyases’ passage を挿入したと考えている⁹⁾。Honigmann は 2 人の王と 2 種類の劇団のアナロジーにも言及し、クローディアスが少年劇団を代表しているのは適切だが、ハムレット王はすでに死んでいるので、現在もシティーで活動しているシェイクスピアの劇団を代表するのは適切ではないと述べている。それに対して、エルシノアにやって来た役者たちは都落ちして一度いわば死亡状態となった身なので、こちらの方がハムレット王のより適切なアナログになると指摘して、ハムレット王への言及は本来 Q2 の旅役者を念頭に置いたものではないかと疑われると述べている。そして、2 人の王と 2 つの劇団のパラレル関係が Q2 の方がより適切だという事実も、the ‘little eyases’ passage が後になってテキストに挿入されたことを示唆していると指摘している。

しかし、この主張の最大の問題点は、ハムレット王のアナロジーはそれより適切になるかもしれないが、Q2 のままでは、少年劇団とクローディアスのアナロジーが全く成立しないことである。Q2 のままでもクローディアスと少年劇団、そしてハムレット王と旅役者というパラレル関係が成立していると考えるのは、ローゼンクランツの “I think their inhibition comes by the means of the late innovation.” という台詞の中の the late innovation を少年劇団の流行と解釈するからである。ところが、シェイクスピアは *Othello* や *I Henry IV* では innovation という単語を rebellion や insurrection という意味で使用している。ローゼンクランツの台詞中の innovation も同様に解釈する注釈者が多く、現代的な novelty の意味と解釈する注釈者は少数派である。ちなみに、アディクション説の主張者の 1 人である Hibbard は、この innovation を disorder あるいは disturbance の意味に解釈している。

仮に、この箇所の innovation が novelty の意味だとしても、また別の問題が生じてくる。そのような重要な情報を提供されたにもかかわらず、ハムレットはまったく反応せず、次の質問へと移っていくからである。少年劇団の流行で役者たちがシティーを追われて来たのなら、その直後に、その役者たちの評判は今も昔と変わらないかとか、今も人気があるかと質問するのは不自然である¹⁰⁾。よって、innovation がここで劇場世界の新流行といった意味を持つことは不可能で、Q2 のままでは、ハムレット王のアナログは存在しても、肝心のクローディアスのアナログ、つまり、何か最近人気上昇してきた流行中のものが存在しなくなってしまうのである。

Hibbard は、Q2 にない 3 つの passage が F に挿入された目的は共通していて、それは観客が劇の展開をより理解しやすくするためであったと主張する。そして、2 番目の passage、すなわち the ‘little eyases’ passage についても、挿入の目的は、すでに Q2 に存在しているアナロジーを強固にするためだと主張し、次のように述べている¹¹⁾。

In the second Shakespeare seizes on the War of the Theatres as a means of strengthening

the analogy Hamlet draws between the public reaction to the new players, the Children of the Blackfriars, and to the new king, Claudius.

Q2のままでは abrupt だから、ハムレットの最後の台詞がよりスムーズに繋がるように、補足説明的な passage を挿入したという考えは理解できる。しかし、新しい役者と新しい王のアナロジーを強化する手段として劇場戦争に飛びついたという主張から判断すると、Hibbard も、Q2のままでも新しい役者たちとクローディアスの対応関係がすでに存在していることを前提にしているようだ。

このように、アディクション説では、the 'little eyases' passage はあくまで追加的な要素として扱われ、F のバージョンは Q2 のバージョンを拡大したにすぎず、その内容に本質的な差はないと考えられているようである。しかし、F バージョンに慣れているとつい当然視してしまう 2 人の王と 2 組の劇団というパラレル関係は、実は Q2 のままでは成立しないのである。この問題を解決するためにローゼンクランツの台詞の中の the late innovation を少年劇団の流行と解釈しようとする、次のハムレットの台詞との間に齟齬が生じてしまう。この点はアディクション説が抱える大きなジレンマだと思われる。

むすび

本論で示そうと試みたのは、the 'little eyases' passage とその直後のハムレットの台詞の一体性である。ハムレットの最後の台詞は the 'little eyases' passage、特にその最後の部分と密接に繋がっており、それを前提として成立している。ハムレットの台詞には、the 'little eyases' passage に登場する新しく流行してきた少年劇団と成人劇団という 2 種類の劇団とパラレル関係を成す、新王クローディアスと先王ハムレットが登場する。さらに、小さな役者には小さな肖像画、買値がつかない不人気に対して買値が倍々につり上がるほどの人気というように、ハムレットの最後の台詞には、the 'little eyases' passage の反響と思われる表現も見られる。個別に取り上げれば些細な一致にすぎないかもしれないが、全体的に見たとき、ハムレットの最後の台詞と the 'little eyases' passage の一体性を十分裏付けているのではないだろうか。

アディクション説では、しばしば、Q2 のままでも意味は通ると主張されるが、その主張は、2 つの劇団と 2 人の王というパラレル関係を暗黙の前提としている場合が多い。しかし、注意深く読むと、Q2 のテキストには、最近流行してきた少年劇団という肝心の要素が欠けている。つまり、Q2 のままでは、the 'little eyases' passage とハムレットの台詞が描出する、2 つの劇団と 2 人の王という一番重要なパラレル関係が成立しないのである。

筆者は、たとえ暫定的であっても、Q2 のような形でシェイクスピアが原稿を書き上げたことを考えることには無理があると思う。もともと Q2 のような形であったものを、the 'little eyases' passage の部分だけを挿入して F のような形にするのは、理論的には可能かもしれないが、本論

で見てきたようなパラレル関係やエコーを考えたとき、その実行可能性は常識的に考えて極めて低いのではないだろうか。むしろ、the ‘little eyases’ passage とハムレットの最後の台詞は一気に書き上げられたものであり、もともとFのような形であったものが、the ‘little eyases’ passage の部分だけが後で何らかの理由でカットされてQ2のような形になったと考える方が現実的なのではないだろうか。

仮に、本論の主張が説得力を持つものだとすると、それは、Honigmann や Hibbard が主張するアディション説の成立を不可能にするだけでなく、Edwards が示唆しているような、差し替え説とでも呼ぶべき仮説の成立も不可能にするだろう。差し替え説とは、the ‘little eyases’ passage の箇所には別の台詞が盛り込まれていて、後にそれがthe ‘little eyases’ passage に差し替えられたという考えである。ハムレットの最後の台詞とthe ‘little eyases’ passage の緊密性が高ければ、そのような差し替えの実行可能性も極めて低いと考えざるを得ない。

しかし、本論で論じたのは、あくまでthe ‘little eyases’ passage とその直後のハムレットの台詞の一体性であるので、Jenkins が主張する、ハムレットの最後の台詞も含めた、もう少し広い部分のアディションの可能性を否定するものではない¹²⁾。しかし、このような説は、創作年代との関係で必要に迫られて考え出されたという側面はあるにせよ、Jenkins も認めているように、アディションの一部だけがQ2の印刷原稿となったfoul papersになぜ残っていたのかという、また新たな問題を発生させることになる。

注

- 1) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), 44-45.
- 2) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History* (Oxford: Clarendon Press, 1955), 312.
- 3) E. A. J. Honigmann, ‘The Date of *Hamlet*,’ *Shakespeare Survey* 9, 26-29.
- 4) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford University Press, 1987), 110-112.
- 5) ハムレットの最後の台詞は、Fでは、“It is not strange: for mine Vnckle is King of Denmarke, and those that would make mowes at him while my Father liued; giue twenty, forty, an hundred Ducates a peece, for his picture in Little. There is something in this more then Naturall, if Philosophie could finde it out.”となっている。Q2との比較的大きな違いは、not very strangeがnot strangeに、make mouths at himがmake mowes at himになっていること、ミニチュア肖像画の買値にfiftyが入っていないこと、そして、’Sbloodが欠落していることであるが、意味の上からは、Q2と本質的な違いはないと考えてよい。
- 6) “if philosophy could find it out.”という表現は、自分ではよく理解できないと思わせるためのカモフラージュだと考えられる。そして、このようなカモフラージュを必要とするということは、そこにはハムレットの本心が込められているからではないだろうか。自分の思考が正常に機能していないように周りの者に思わせながら、その裏で本心を語るという、いわゆるdouble entendreは、ハ

ムレット原話を興味深いものになっている重要な要素の1つである。

- 7) Dowden と Jenkins 編集によるアーデン版『ハムレット』の注釈参照。
- 8) Honigmann は、叔父が以前人々から軽蔑されていたというところも、少年劇団が一時そのような扱いを受けたことと平行になると指摘している。Honigmann, 'The Date of *Hamlet*,' 28参照。
- 9) Honigmann, 'The Date of *Hamlet*,' 29.
- 10) この点は Philip Edwards も彼が編集した The New Cambridge Shakespeare 版『ハムレット』の注釈の中で指摘している。
- 11) Hibbard, ed., *Hamlet*, 111-112参照。このような丁寧な説明の追加、しかも数十行にわたるような追加は F の全般的な傾向、すなわち、Q2 の長い説明をカットして、台詞を短くしていく傾向とは矛盾していると多くの人が感じて不思議ではない。もっとも、Hibbard は、F の一見矛盾したように見えるカットとアディションは互いに整合性がとれていて、すべて同一の目的、すなわち、Q2 よりもより直接的で、より素早く理解できる上演を可能にするという目的を果たしていると主張する。
- 12) Jenkins, ed., *Hamlet*, 5-7.